偶発的に発見できた心臓血管腫の１例

◎望月 大嵩、浦山 直樹[1)]、鈴木 駿輔[1)]、石原 潤[1)]、平松 直樹[1)]
地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院[1)]

【はじめに】心臓腫瘍は腫瘍全体からみても非常に稀な疾患であり、原発性心臓腫瘍（PCT）と二次性心臓腫瘍に大きく分類され、二次性心臓腫瘍が多くを占める。今回我々は、経胸壁心臓超音波検査（TTE）にて左心室内に腫瘤を認め、病理組織検査により血管腫と診断された症例を経験したので報告する。【症例】60 歳代、女性。息切れを主訴に他院を受診し、TTE にて左室中隔に腫瘤を認めたため、精査、加療目的で当院への紹介受診となった。【既往歴】高血圧。脂質異常症。虫垂炎手術（16 歳）。右乳癌（54 歳）【現症】身長 153.9cm、体重 51.9kg、体温 36.2℃、血圧 142/74mmHg、心雑音は聴取せず。【心電図所見】正常洞調律(HR 58bpm)【TTE 所見】IVSd 8mm、LVPWd 10mm、LVIDd 44mm、LVIDs 25mm、LAD 39mm、EF（MS 法） 68%、局所壁運動異常、弁膜症は認めなかった。左室中隔壁に有茎性の腫瘤を認めた。大きさは 26×16mm、可動性有り、辺縁はやや整、内部エコーは高輝度で一部低輝度であり、腫瘤内部に明らかな血流信号は認めなかった。【経過】後日左室腫瘍切除術を施行、病理組織検査にて良性の血管腫と診断された。その後の TTE では腫瘤像を認めることはなく、全身症状も良好のため退院となり現在も経過良好である。【考察】心臓腫瘍の中で原発性と二次性の比率は 1:30 であり、PCT の 75%が良性であるといわれている。さらに良性 PCT の中でも、粘液腫が 52%を占め、血管腫はわずか 6%と稀である。心臓血管腫の臨床症状は他の心臓腫瘍と同様に発生部位と腫瘍の大きさに左右されるが、特徴的なものはなく約 60%が無症状といわれ、超音波検査、CT、MRI、剖検時などで偶発的に捉えられることが多い。心臓腫瘍の診断において、各種画像診断を含めた臨床的アプローチはあくまで可能性であり、組織病理学診断が標準的手法となる。腫瘤の第一発見者となる機会が多い TTE では発生部位、大きさ、形態、可動性の有無を観察し、また、心腔拡大、収縮・拡張障害、弁機能異常、肺高血圧、心膜液貯留の評価を行う必要がある。病理診断で悪性と診断された場合の予後は不良で、切除は通常適応されず、年単位の予後は望めない傾向にある。そのため、我々は画像と病態に精通した知識と技術を身につけ、正確な検査結果を報告することで早期診断に繋げることができる。【結語】我々はこの 1 例を経験し、検査を行う上で主訴にとらわれすぎず、隅々までスクリーニングをする重要性と、腫瘍を疑った時の観察、評価すべき事項の再確認をすることができた。

連絡先：静岡県静岡市葵区北安東 4 丁目 27-1
TEL 054 247 6111
mail mohirozzz@yahoo.co.jp